

# 女性文化研究所創立二十周年によせて

第四代所長 後藤 淑

女性文化研究所は創立されて、二十年になるという。月日の過ぎるのは早いようで遅くもある。「継続は力なり」という言葉がある。長く続けて行くことの中に、自然といろいろな力が育てられて来るという意味であろう。これは、研究機関に限ったことではなく、あらゆることに通ずることであろう。

私は四代の研究所長に推された。行政的・経営的な能力のない私ですのでお断りをしたのだが、いつとはなく、お引受けをすることになってしまった。研究所員伊藤セツ教授・掛川典子教授の助けを受けて、所長の役目をはたして来たように思う。

人見楠郎先生が、女性はその数において、人口の半数をしめている。女性がもっと社会の表面に出て活躍してもよいはずであるということをいわれたと聞いている。研究所の目的の一つがそこにあることは明らかである。

問題は女性文化と男性文化との関係をどうとらえるかである。女性文化を考える時、その傍に男性を置いて、同時に考えることが必要である。

能を大成した世阿弥<sup>ぜあみ</sup>は、その著『風姿花伝』の中で、次のようなことをいっている。陰陽和するところの境に、物事を成功させる重要な鍵があるというのである。味あうべき言葉である。陰陽（女性・男性）という本来性格の異なるものを、対立するものとしてのみとらえず、統合すべきものとしてとらえようとしたところに注目すべき点がある。この考え方が、能を大成した原動力となったのである。

この和の境の中に、世阿弥は演者の心の在り方をおいていたようである。能は萬事「かゝりなり」といった言葉の中にそれがあらわれていると思う。「かゝり」とは演者の能に対する姿勢・心の表現である。世阿弥が心ない批判を嫌ったのもここにある。

今日でも、対立するものを統一して、よい結果を作り出そうとする考えは、私どもの中に残っている。世阿弥が没して六百年、いまなお、この考え方が残っていることは、そこに眞実があるからだと思えるのは思いすぎであろうか。

二十年間という時間は研究の世界では極めて短く、出発点にすぎないという感じがある。女性文化には、未知のことが多い。今後、研究会などを通じ、その成果を世に問う作業が必要と思う。

（ごとう はじめ 昭和女子大学名誉教授 元大学院生活機構研究科教授）